光村図書の国語

歩きだす君に、
ゆるぎない言葉の力を。

教授用資料

本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

光村図書

教授用資料
光村図書の国語

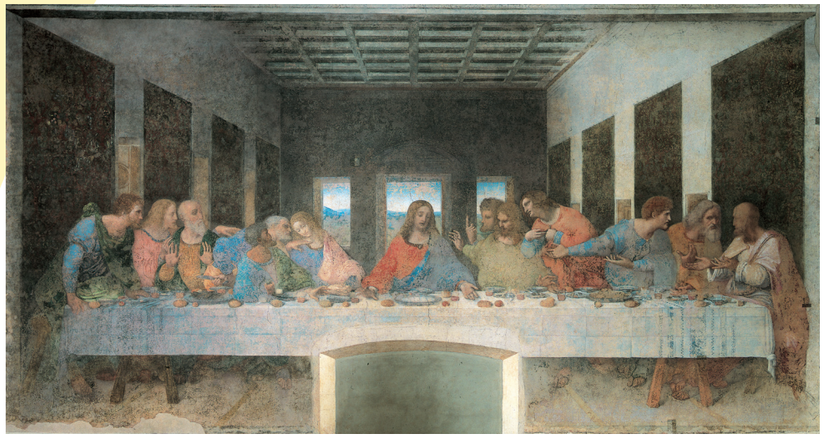
2023年11月30日発行

発行者　吉田直樹
発行所　光村図書出版株式会社
〒141-8675
東京都品川区上大崎2-19-9
電話 03-3493-2111（代表）

光村図書ウェブサイト
光村図書　検索

デザイン　dig
イラスト　野田あい、成田恵美
印刷　協和オフセット印刷





五百年も昔に描かれた名画は、
二十一世紀の
今も生きている。

——布施英利「君は『最後の晩餐』を知っているか」より

上気したような、えもいわれぬ色

——大岡信「言葉の力」より



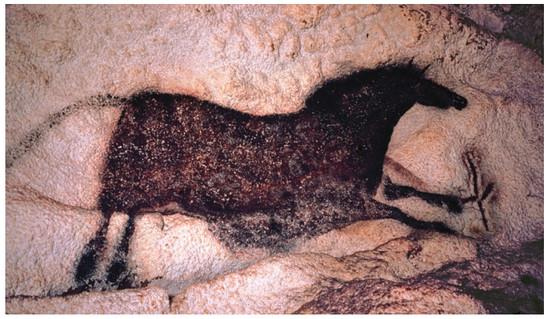
強い顔でした。
でも悲しい悲しい
顔でした。

——米倉斉加年「大人になれなかった弟たちに……」より

「言葉の時代」は終わらない。

飛鳥の工人たちは、
木は二度生きる、
と信じていたのでしょう。

——小原二郎「法隆寺を支えた木」より



人類は、地球上に初めて
出現したときから、すでに芸術家であり、
かつ、科学者であった

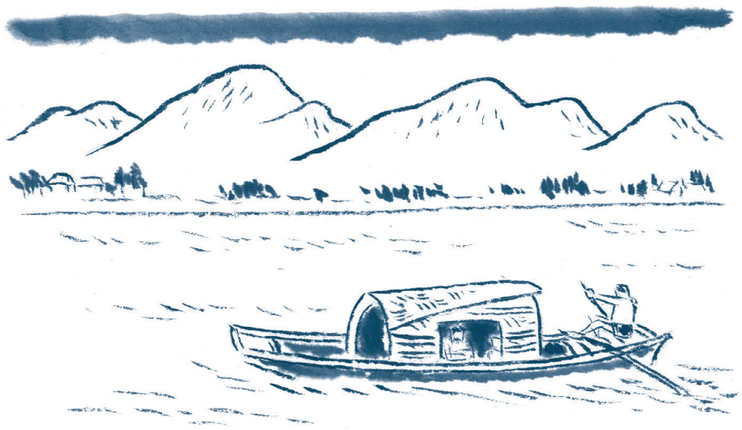
——中谷宇吉郎「ラスコー洞窟の壁画」より

あの坂をのぼれば、
海が見える。

——杉みき子「あの坂をのぼれば」より

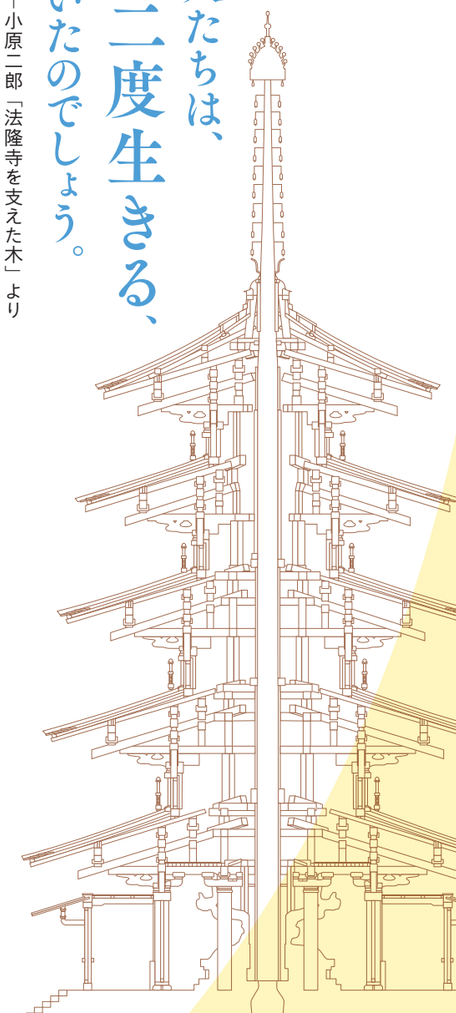
私は、テラスの食堂で、
朝の光による
ガラスのコップの
美しさを見つけたのです。

——川端康成「朝の光の中で」より



もともと地上には道はない。
歩く人が多くなれば、
それが道になるのだ。

——魯迅／竹内好訳「故郷」より



光村図書「国語」のあゆみ

光村図書は、七十年以上にわたり、
子供たちが生きていく未来を見据えた教科書を送り出してきました。
次の時代に踏み出すための、ゆるぎない言葉の力を、誰もが身につけられるように。
そんな願いを胸に、これからも光村図書は子供たちとともに歩んでいきます。



1952年度版

主な改訂年度

初出の主な教材（●は二〇二一年度版まで継続して掲載されている教材）

1955年度版



- 「オツベルと象」宮沢賢治
- 「屋根の上のサワン」井伏鱒二
- ●「少年の日の思い出」ヘルマン・ヘッセ／高橋健二訳

1962年度版



- 「片耳の大しか」椋鳩十
- 「魔術」芥川龍之介
- ●「走れメロス」太宰治

1966年度 版



- ●「故郷」魯迅／竹内好訳
- 「落葉」ポール・ベルレーヌ／上田敏訳

1969年度版



- 「杜子春」芥川龍之介
- 「ラスコー洞窟の壁画」中谷宇吉郎
- 「椰子の実」島崎藤村

1972年度版



- 「フジダカバチの秘密」アンリ・ファーブル／古川晴男訳
- 「朝の光の中で」川端康成
- 「サーカスの馬」安岡章太郎
- ●「大阿蘇」三好達治
- 「切れのパン」F・ムンティアス／直野敦訳
- 「山椒魚」井伏鱒二

1978年度版



- 「鼓くらべ」山本周五郎
- 「くるみ割り」永井龍男

1981年度版



- 「赤い実」井上靖
- ●言葉の力」大岡信
- 「子馬」ミハイル・ショーロホフ／小野理子訳
- 「法隆寺を支えた木」小原二郎
- 「民族と文化」本多勝一

1987年度版



- 「あの坂をのぼれば」杉みき子
- ●「植物のにおい」岩波洋造
- 「大人になれなかった弟たちに……」米倉斉加年
- ●「ちょっとうち止まって」桑原茂夫
- ●「盆土産」三浦哲郎
- 「字のない葉書」向田邦子
- 「車掌の本分」かんべむさし

1993年度版



- ●「野原はうたう」工藤直子
- 「命ということ」中澤晶子
- 「北の国から」倉本聰
- 「アジアの働く子供たち」松井やより
- 「わたしを作ったもの」ロバート・ウェストール／金原瑞人訳
- ●「握手」井上ひさし

1997年度版



- 「そこまで　とべたら」安東みきえ
- ●「魚を育てる森」松永勝彦
- ●「高瀬舟」森鷗外
- 「お辞儀するひと」安西均
- ●「温かいスープ」今道友信

2002年度版



- 「ゼブラ」ハイム・ポトク／金原瑞人訳
- ●「モアイは語る――地球の未来」安田喜憲
- ●「二つの悲しみ」杉山龍丸
- 「アラスカとの出会い」星野道夫

2006年度版



- 「にじの見える橋」杉みき子
- 「さつき」伊集院静
- 「未来をひらく微生物」大島泰郎
- 「江戸からのメッセージ」杉浦日向子
- ●「挨拶――原爆の写真によせて」石垣りん

2012年度版



- ●「花曇りの向こう」瀬尾まいこ
- 「空を見上げて」山中 恒
- ●「作られた「物語」を超えて」山極寿一
- 「エルザルバドルの少女　ヘスース」長倉洋海
- ●「誰かの代わりに」鷲田清一

2016年度版



- ●「ダイコンは大きな根？」稲垣栄洋
- ●「星の花が降るころに」安東みきえ
- 「アイスプラネット」椎名 誠
- ●「君は『最後の晩餐』を知っているか」布施英利

2021年度版



- ●「シンシュン」西 加奈子
- ●「『言葉』をもつ鳥 シジュウカラ」鈴木俊貴
- ●「クマゼミ増加の原因を探る」沼田英治
- ●「人工知能との未来」羽生善治

新たな教育の礎を作る

光村図書の「国語」黎明期

光村図書が、中学校の国語教科書「中等新国語」を初めて発行したのは、一九五二年。戦後、日本が新たな一歩を踏み出そうとする、まさにその時代のことでした。

当時の教科書は、「文学編」と「言語編」に分かれており、「言語編」には、会議の進め方や討論のしかたを学ぶ教材が掲載されていました。話し合いによる課題解決を目ざす新しい教材作りからは、言葉の力を信じ、民主主義社会の実現を志す、作り手たちの熱意が伝わってきます。

世代を超えて受け継がれる教材

「教科書クロニクル」で振り返る

光村図書の教科書には、長期にわたって掲載され続けてきた教材があります。「少年の日の思い出」「走れメロス」「故郷」は、初掲載から約六十年、多くの方の心に残っていることでしょう。

光村図書のウェブサイトでは、生年月日を入力することで、当時使っていた国語の教科書・教材を検索できる「教科書クロニクル」を公開しています。この機会に、中学校時代を振り返ってみませんか。



教科書クロニクル

丈夫で軽い本を目ざして

独自の表紙・本文用紙の開発

布のような独特の風合いの表紙に変わったのは、この版から。一年間、毎日のように使うものだから、汚れや擦れに強い紙を用いて、頑丈に作ってあります。本文用紙も光村専用です。子供たちの負担を軽減するために、できるだけ薄く軽く、それでいて裏写りが少ない用紙を開発し、使用しています。

業界初・拡大教科書の発行

モノクロからカラーへ

カラーページの登場



長年にわたって、教科書の本文はモノクロでしたが、二〇〇二年度版で全面的にカラー化しました。鮮やかな挿絵や写真が、子供たちの学ぶ意欲を高めます。

より大きく、より学びやすく

教科書の大判化



A5判からB5判へと大判化したのは、二〇〇六年度版のこと。図表や写真を含む多様な文章を、視覚的に配置できるようになりました。

業界初・デジタル教科書の発行

不確かな未来を生き抜くための、言葉の力

不安定な世界情勢、感染症の流行、気候変動と自然災害、生成ＡＩの浸透……。先の見えない「ＶＵＣＡ」の時代、子供たちにはどんな力が求められるのでしょうか。

例えば、複数の情報を比較し、その真贋を見極めること。図表と文章を結び付け、適切に読み解くこと。根拠に基づき、自らの意見を論理的に述べること。多様な価値観をもつ他者と合意を形成し、問題を解決すること。

こうした力を身につけるために、国語の教科書にできることは何か。今、お使いになっている教科書が、私たちの答えです。

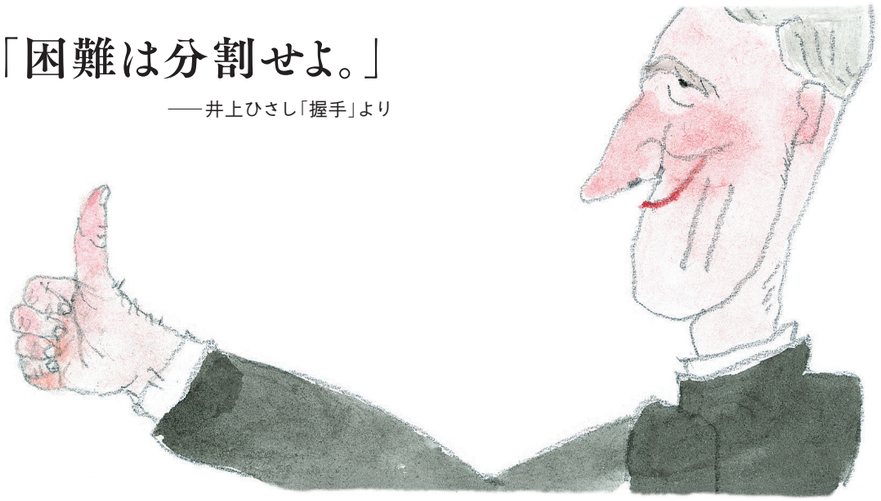
光村図書の「国語」は、変化を恐れず、時代とともに変わり続けてきました。子供たちに未来を切り開く言葉の力を。この思いを胸に、私たちはこれからも新たな教科書を作り続けます。



変える勇気、変えないこころ。

「困難は分割せよ。」

――井上ひさし「握手」より



光村図書の教科書には、長年掲載されている文学作品が多くあります。なかには親・子・孫の三世代に読まれた作品も。長く愛されてきた作品に共通するのは、人間の本質を鮮やかに描き出している点です。文学を通して、時代が変わっても揺らぐことのない普遍的価値に、心震わせてほしい。創刊以来変わらない、光村図書の思いです。

次にご紹介する新聞記事（中日新聞、二〇一八年十二月十九日朝刊19頁）は、三十年にわたって教科書に掲載されている小説「握手」の一節で、人生が変わった先生のお話です。

国語の先生として長年教壇に立ち続けてきた、馬渕敬（まぶちたかし）先生（岐阜県本巣市立席田（むしろだ）小学校）は、二〇一五年に突然脳梗塞で倒れ、失語症になりました。

話そうとしても言葉にならない。自分や妻、小学生だった長女と長男の名前も言えなかった。テレビで字幕を見ても意味が分からず、本も「文字が書いてあるだけ」。がくぜんとした。（中略）一カ月後の退院時、話せた言葉は「ほい」「いいえ」「すみません」の三語だけ。医師からは「復職は無理」と言われた。

国語教師としての命である言葉を失い、学校に戻ることを諦めかけた馬渕先生。それでもリハビリを続けるうち、簡単な文の読み書きができるように。そんな近況をＳＮＳで発信したところ、かつての教え子たちから、たくさんの手紙やメッセージが届きました。

その中に自分がかつて生徒に贈った言葉があった。「困難は分割せよ。」井上ひさしの小説「握手」の一節。授業で引用し「困難は分割して、一つ一つ片付けていく。きっとその困難は終わるはず」と教えた。手紙には「先生が言っていたように必ずうまくいくから」とつづられていた。涙があふれ、復帰を決意した。（中略）言葉を失ってその力を知り、言葉に救われた。

その後、馬渕先生はリハビリを続け、復職。デジタル教科書の読み上げ機能を活用したり、口頭での説明が難しいぶん、自作のプリントを配布したりと、工夫を重ねながら生徒の学びに寄り添っています。


伝えたい
突然、患者に
言葉は救いの力を持つ
教え子の励まし
復職の支えに

時を超える言葉に今、私の物語が重なる

光村図書の「国語」が

大切にしていること

言葉に出会うために



これまで、
どんな言葉に出会ってきただろう。
そして、これから
どんな言葉に出会っていくだろう。

教科書を開けば
たくさんの言葉が
あなたを待っている。

国語を学ぶのは
あなた自身を作りあげるため。

言葉は
あなたと世界をつなぎ
あなた自身の世界を作りあげる。

手に入れた言葉の数だけ
世界がはっきり見えてくる。
身につけた言葉の数だけ
自分が大きくなっていく。

さあ、友達を増やすように
言葉を増やしていこう。
言葉の数だけ、あなたは世界に近づく。
言葉の数だけ、あなたの世界は大きくなる。

言葉に対する姿勢

上の文章は、平成二十四年度版から一年生の巻頭に掲げているものです。

「国語は言葉に出会うための教科」。編集会議で出た、あたりまえにも思えるこの言葉に、私たち編集部は、はっとしました。確かに、私たちは日々多くの人の姿を目にしながらも、ただすれ違っています。言葉もそれと同じ。本当の意味では「出会って」いないのかもしれません。

言葉に「出会う」ために、国語の教科書として何ができるか。未来を生きる子供たちに、どんな言葉を手渡していけるか。どんな世界を見せられるか。――言葉に真摯に向き合い、言葉との出会いの場を可能な限り提供する、そんな教科書でありたいと思っています。

教材へのこだわり

約二千本。令和三年度版で審議した教材候補の数です。改訂のたび、教材は全て見直し、もっとよいものを、という思いで、一から候補を探しています。

「言葉の力をつけるための教材」だからこそ、選定に一切の妥協はありません。そのまま掲載できる候補がなければ、書きおろしを検討します。価値ある教材になり得るか。未来につながるテーマといえるか。学習指導要領や子供の発達段階に適した内容か、吟味を重ねて依頼します。

書きおろしは、第一稿が届いてからが勝負。構成や「てにをは」に至る表現まで、「教材」として掲載できるレベルに高めていく必要があります。全国の子供たちが読む。その責任の重さに押しつぶされそうになりながら、文章と向き合う日々が続きます。

時には、著者と意見がぶつかることも。そんなときは「子供にとってどうあるのがよいか」を軸に、教材としてどうしても譲れない部分を、言葉を尽くして伝えます。すると、「それなら、こんな表現はどうだろう。」と議論が始まります。

光村図書の教材の底力は、子供たちのために、著者と二人三脚で作りあげる、熱意と覚悟にあります。



1年「少年の日の思い出」
挿絵・丹地陽子
文章から自由に想像を広げられるように、表情などは描きすぎないよう配慮しています。

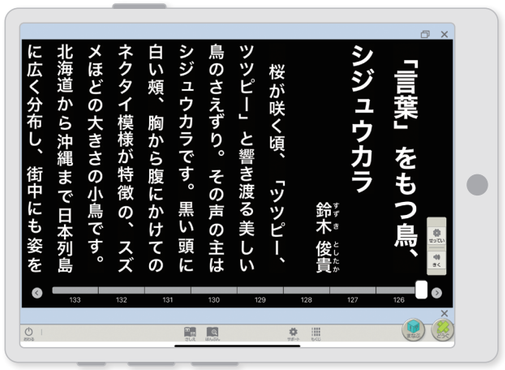
子供たちへの思い

学校で学習者用デジタル教科書を使用している、ある識字障害の中学生から手紙が届きました。

> 学校の教室でみんなと同じように教科書を使って勉強する大切さを知ってほしい。

学校には、さまざまな特性のある子供たちがいます。光村図書では、早くから「デジタル教科書」や「拡大教科書」、「振り仮名付き本文紙面」を発行し、誰もが等しく学びのスタートラインに立てるように力を尽くしてきました。

教育DXに向けたGIGAスクール構想の進展で、子供たちを取り巻く環境は変わり始めています。私たちはこれからも時代を見据え、未来を切り開く言葉の力を、そして共に学ぶ楽しさを、全ての子供たちに、届け続けます。



学習者用デジタル教科書

一人一人異なる、見え方や聞こえ方の特性に合わせて、画面をカスタマイズできます。